大学生のビブリオエッセー

産経新聞　令和元年（2019年）9月28日（土）

奈良県桜井市　髙幣あゆみ　(20)

誰かがそばにいてくれる

【イヌのしんぶんこうこく】
ロリー・S・ラーマン作　アリソン・バートレット絵
山口文生訳（評論社）

2019.9.28

「命の大切さや『誰かの存在が当たり前ではない』ということを、子供たちに伝えたい」。保育士をめざすコースで学んでいた私は高3の秋に受けた新聞の取材で、こう語った。そして今もなお思い続けている。

高校の3年間通い続けた場所がある。動物たちとふれあえる公園だ。ここでボランティアとして活動し、「動物慰霊祭」では来園者に、絵本の読み聞かせをしていた。そのうち1冊が『イヌのしんぶんこうこく』である。

イヌのニーロと少年ジョージのお話だ。田舎暮らしに物足りないニーロは都会で暮らしたいと思い、新聞広告を出して都会の飼い主を探す。親身になって手伝ったのが仲良しのジョージだった。

返事はたくさん届いたが、理想の飼い主はなかなかいない。そんなある日、見つかった。さっそく連絡が来て、ニーロは引っ越しの準備を始める。手伝ったのはやっぱりジョージだ。

去り際、ジョージは2人がよく遊んだトランプを手渡した。これで遊ぶんだろ、忘れるなよ、と。ニーロはジョージの寂しそうな顔に気づいてはっとする。自分を一番わかってくれている人はすぐそばにいたんだ。

いつも一緒にいる人が隣にいてくれることを、当たり前ともそうじゃないとも、考えたことなど今までなかった。しかし、この絵本を通して、そんな気持ちを誰かに伝えたいと3年間思っていた。

それは3年目だった。新聞を読んで「心に響きました」と言ってくださる人が現れたのだ。私はひとりじゃない、誰かがそばに、と気づけた瞬間だった。

※無断転載不可